

李白「静夜思」本文変遷史新考

—『文選』所収の魏文帝「雜詩二首」との関連性をめぐって—

陳 翀

【キーワード】唐詩選、李白、静夜思、齊梁格、五言古詩、文選、魏文帝曹丕

はじめに

本稿は、筆者が最近取り込んでいる唐代詩文（主に杜甫・李白・白居易・元稹）における文選詩語及び李善注の受容に関する調査の一環である。前稿の「『怕春』考——杜甫における文選李善注の受容に関する一考察——」では、杜甫の「江畔独步尋花七絶句」を取り上げ、この七首の絶句の基調となる詩語が、文選詩語及び李善注を踏まえたものであることを指摘した¹⁾。本稿は、引き続き李白の名作である「静夜思」に焦点を当て、まず当作品の本文変遷の経緯を明らかにする。これによって、現在定説になりつつある明代文人改竄説は再検討する必要性が生じる。さらに、五言短詩及び歌詩の格律を踏まえながら「静夜思」の原型作品を探し求めた結果、本詩は『文選』所収の魏文帝「雜詩二首」に基づきアレンジされた五言四句の短編歌詩である可能性が浮き彫りになる。そして、この原型作品の

存在こそ、本作品に様々なバージョンをもたらした根源であったことも指摘できる。

—

周知のように、李白の名詩である「静夜思」は、かねてから一般に世に流布した本文と、李白詩文集の本文との間に幾つか重要な文字異同を見せていた。このことについて、早くは瞿蜕園・朱金城校注の『李白集校注』に、次のような校語が施されている。

〔看月光〕各本李集均作看月光、唐人萬首亦作看月光。王士禛

唐人萬首絶句選及唐詩別裁集均作明月光、疑爲士禛所臆改。

〔山月〕蕭注引古詩「明月何皎皎」、再引魏文帝「仰看明月光」、

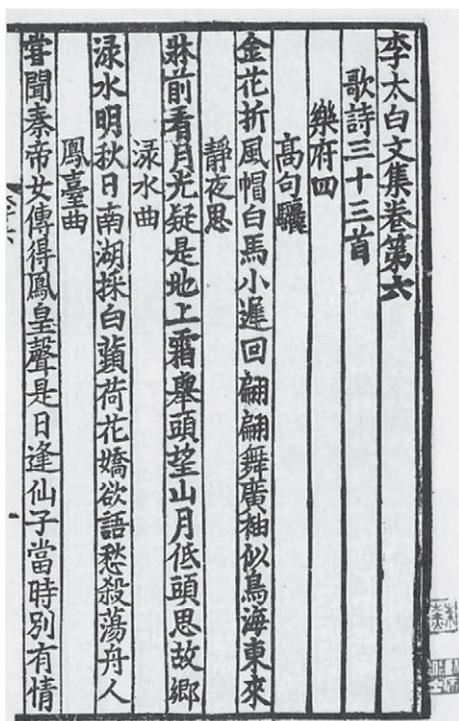
似蕭氏以山月爲明月。但刊本仍作山月。唐宋詩醇作明月。

以上のように、両氏は、「牀前明月光、疑是地上霜。舉頭望明月、低頭思故郷」という通行の本文は、清末清初の文人である王士禎（二六三四〔明崇禎七年〕～一七一二〔清康熙五十年〕）の恣意的な改竄によるものではないかと考えているようである。

一方、のちに森瀨寿三氏の新たな調査によって、実は「静夜思」にはより多くのバージョンが存在していることが明らかにされたのである。森瀨氏は、諸異文を整理し、「静夜思」の本文を次のような四つのバージョン（傍点は筆者による。以下同じ）に纏めた。³⁾

A 牀前看月光、疑是地上霜。舉頭望山月、低頭思故郷。

B 牀前看月光、疑是地上霜。舉頭望明月、低頭思故郷。



C 牀前明月光、疑是地上霜。舉頭望明月、低頭思故郷。
D 牀前明月光、疑是地上霜。舉頭望山月、低頭思故郷。

ここでまず先に確認しておく必要があるのは、現存する宋蜀刻本『李太白文集』（上図を参照）をはじめとする李白詩文集の諸刊本・諸校注本においては、すべてAで統一されており、とくに本文における文字異同等は存在していないことである。B・C・Dは、何れも唐宋詩選集或いは総集に見られる異文である。ちなみに、森瀨氏の調査によれば、Bは、明朝の黄習遠修補『宋洪魏公進萬首唐人絶句』（京都大学東洋学文献センター）及び内閣文庫蔵本）と李攀龍編『詩刪』（尊経閣蔵本）などをはじめとする諸本に見られるものであり、Cは李攀龍編『箋釈唐詩選』（内閣文庫蔵蔣一葵注七卷附一卷萬曆二十一年序刊本）を初見とするもので、Dを採用したのは、「いづれも清朝に入ってから以後のテキストである」⁴⁾。

このように、森瀨氏は、多くの版本を丹念に調査した上で、「静夜思」本文の変遷経緯及びその原因について、次のように纏めている。⁵⁾

一、李白「静夜思」の本文中「牀前看月光」の「看」、および「舉頭望山月」の「望」という動詞、それに「山月」の語は、この詩の構造上、重要な働きをしている。

二、明代の李攀龍『唐詩選』（萬曆刊本）で初めて第一句を「牀

「前明月光」、第三句を「擧頭望明月」に作る文が用いられたが、それ以前の版本で、第一句を「牀前明月光」、第三句を「擧頭望明月」に作るものは、別集・総集を通じて皆無である。

三、江戸元禄期における服部南郭の和刻本李攀龍『唐詩選』では、他の版本を参照して原文どおり「牀前明月光」「擧頭望明月」の文を用いており、これが『唐詩選』の流行とともに日本では伝承された。

四、中国では李攀龍をはじめとする古文辞派衰退後も多くの版本で、第一句「牀前明月光」、第三句を「擧頭望明月」に作る文が用いられたが、やがて清朝に入り『四庫全書総目提要』で『李攀龍唐詩選』が「偽書」と指弾されると、李攀龍『唐詩選』は存在さえ無視され、代わって蘅塘退士『唐詩三百首』が流行するに及んで、李白「静夜思」は、「夜思」という篇題のもとに第一句を「牀前明月光」、第三句を「擧頭望明月」に作る文が受け継がれ、以後の中国で暗誦用のテキストとして現在まで世界中の中国人によって伝承されて来ている。

五、李攀龍『唐詩選』は、萬曆三年（一五七五）の刊本が浙江省寧波の天一閣にかつて所蔵されていた記録があり、「偽書」とすることは出来ない。

つまり、森瀬氏は、これらの異文が出現した発端は、王士禎ではなく、より早い時期の明代中期の文人李攀龍の意図的な改竄によるものであるとし、さらに、改竄の理由を次のように推測した。

「看」の字音が唐代に平声が主であったものが、後世に仄声が主となって平仄式が近代詩のそれに等しくなるのを嫌ったことに因るのであるうし、第三句に「明月」を用いるのは、「見る」という動詞が無くなることによる第四句から第句への回帰循環構造を補う働きを目的としたのであろう。

さて、李攀龍撰『唐詩選』が偽書であるかどうかという問題はここで一旦おくとして、まず、森瀬氏の文献調査範囲は、あくまで現存する明清時代の唐宋詩選集或いは総集の版本に限定されていたことが明白であり、果たして明代以前の典籍において、類似する「静夜思」異文は本当に存在しえないのか、些か疑問が残る。さらに、たとえ『唐詩選』の本文が、確かに森瀬氏の指摘のように、明代の李攀龍が近代音律（恐らく平水韻）の平仄に合わせて書き直したものであるとしても、依然として疑念が残る。ちなみに、仮に第一句の「明」（広韻下平十二庚／平水韻下平八庚）「看」（広韻上平二十五寒・去声二十八翰／平水韻上平十四寒・去声十五翰）の両字に、明代文人の発音習慣によって平仄の問題が生じたとしても、第三句の「明」と「山」（広韻上平二十八山／平水韻上平十五刪）と

は、唐宋時代においても、明清時代においても、同じく上平声であり、平仄の問題は存在していないはずである。また、森瀬氏が提示している「回帰循環構造」という理論は、必ずしも既存の詩学書に提示されていた詩歌作法ではなく、むしろ五言絶句という最短詩型の中に、敢えて同じ詩語を繰り返したことで自体が、普通ではあり得ない書き方であると考えた方が自然であろう。つまり、森瀬氏の論考を経ても、依然として腑に落ちないところが存在する。

二

前引した森瀬説では、今日中国に通行する「静夜思」本文は、明朝李攀龍の改竄を継承した清朝蘅塘居士（孫洙、字臨西）『唐詩三百首』（一七六三〔乾隆二十八年〕の成書）の流行によってもたらされた現象であると説明されている。しかしながら、果たして清朝において、「静夜思」の本文は、本当に李攀龍本文によって統一されたのか、些か疑問が残る。

ここで改めて清朝の館臣が編纂した唐宋詩集を調査してみると、各本（影印文淵閣四庫全書本）に収録した「静夜思」の本文は、以下のようになっていることがわかる。

① 『全唐詩』巻一百六十五

牀前看月光、疑是地上霜。擧頭望山月、低頭思故郷。

② 『佩文齋詠物詩選』巻三

四

牀前明月光、疑是地上霜。擧頭望明月、低頭思故郷。

③ 『御選唐詩』巻二十七

牀前看月光、疑是地上霜。擧頭望山月、低頭思故郷。

④ 『御選唐宋詩醇』巻四

牀前明月光、疑是地上霜。擧頭望山月、低頭思故郷。

⑤ 『御定全唐詩録』巻二十三

牀前看月光、疑是地上霜。擧頭望山月、低頭思故郷。

以上の書物は、殆どは清朝館臣が康熙帝の勅命を受けて編纂した勅撰集であり、清朝最高の学術レベルを代表していることに違いないであろう。それ故、清末に至るまで幾度も上梓・覆刻されており、多くの清朝文人に愛用されていたのである。しかしながら、その中で、李攀龍の本文を採用したのは、わずか『佩文齋詠物詩選』の一本のみである。換言すれば、清朝に入っても、「静夜思」の本文は、決して李攀龍本によって統一されているわけではなく、多くの文人の中に、依然として多種多様な本文が共存していたのである。さらに一言足せば、今日の中国の人々が一律に『唐詩選』や『唐詩三百首』の「静夜思」本文を口ずさんでいるのは、『唐詩三百首』の影響というより、むしろ近代の学校教科書がその「静夜思」本文を選んだ影響が大きかったのである。⁷⁾

さらに、集部という狭い範囲に限定せず、より広範囲で文献調査を行えば、実は「牀前明月光」という本文は、少なくとも南宋時代

にすでに存在していた可能性が浮上してきた。たとえば、南宋文人の葉廷珪（生卒年不明、徽宗政和五年〔一一一五〕進士）が編纂した類書『海録碎事』（影印文淵閣四庫全書本）巻一「月門」に、次のような一文が記されている（左図を参照）。

地上霜

牀前明月光疑是地上霜 李白詩

以上のように、もし四庫全書本が葉廷珪の『海録碎事』の原形を保っていたのであれば、「牀前明月光」という異文は、李攀龍の改竄によって生じたものではなく、久しく南宋文人の間に伝承されて

娟魄已三孕言三次月生也 <small>王昌齡詩</small>	白玉盤	小時不識月呼作白玉盤又疑瑤臺鏡飛在青雲端 <small>李白詩</small>	瑤臺鏡 <small>見上</small>	地上霜	牀前明月光疑是地上霜 <small>李白詩</small>	半輪秋
------------------------------------	-----	--	--------------------------	-----	----------------------------------	-----

いたものであると言えるであろう。ただし、現存する『海録碎事』各本の該当記述に前掲の清朝諸唐宋詩選集・総集と同じような文字異同が存在しているため、残念ながら、『海録碎事』の記事のみで、南宋時代にすでに「牀前明月光」という本文が存在したと断言するには至らない。

ところが、さらに調査を進めていくと、先行研究に全く指摘されていない「静夜思」の新たな異文が存在していることがわかった。

清朝文人の呉景旭が編纂した『歴代詩話』（影印文淵閣四庫全書本）巻六十七「壬後集上之下・元詩」に、宋末元初の文人范德機（一二七二〔南宋咸淳八年〕～一三三〇〔元天曆三年〕）「木天禁語・五言古篇法」という記事が収録されている。この記事に、次のような一段の記述が窺える。

辭簡意味長、言語不可明白說盡、含糊則有餘味。如「步出城東門、悵望江南路。前日風雪中、故人從此去」、「忽見明月光、疑是地上霜。起頭望明月、低頭思故郷」、「開簾見新月、即便下階拜。細語人不聞、北風吹裙帶」。

右記の范德機記事に見られる「忽見明月光、疑是地上霜。起頭望明月、低頭思故郷」という詩は、間違いなく従来確認できていなかった李白「静夜思」の新バージョンであろう。新発見のこの「静夜思」本文では、まず、第一句の「牀前看」の三字が、「忽見明」

に改変されていることがわかる。これによって、「静夜思」第一句第三字における「看」と「明」との文字変化が、明代以前にすでに存在していたことがほぼ確定できる。さらに、『海録碎事』の記事に収められていない第三句の文字異同、つまり「山月」から「明月」への変化も、該当本文によって新たに確認できたのである。よって、現在知られている第三句における「山月」から「明月」という文字変遷も、明代の李攀龍によるものではなく、少なくとも元朝初期以前にすでに存在していたことが判明する。さらに、范德機が、「静夜思」のこのバージョンを五言古詩の模範作品として挙げていることから、この詩が、当時の文人の間に広く伝わっていて、高い評価を得ていたことも推測される。

以上の考証を踏まえると、李白の「静夜思」は、明代以前に、すでに様々な異文が世に伝えられていた可能性がより確実となってくるのである。

三

さて、以上の考証によって、少なくとも宋元時代において、「静夜思」にすでに幾つかの異なるバージョンが世に行われていたことが判明した。以下は、まず、詩型の観点から現存する五種類の本文に些か分析を加え、さらに、これらの多くの異文が生まれた原因について、二三の私見を述べる。

すでに幾つかの注釈書に言及されているように、現存する李白詩

文集に収録されている「静夜思」は、楽府詩の齊梁格に基づき創作された歌詩である⁹⁾。齊梁格の規範について、中晩唐の詩字書である『金針詩格』（伝白居易作）は、次のように解説している¹⁰⁾。

詩有齊梁格、四平頭、謂四句皆用平字入是也。兩平頭、謂第一句第三句用平字入是也。

右記の『金針詩格』の記述に従うと、現存する「静夜思」各テキストを、以下のように「齊梁格」と「非齊梁格」に二分できる。

I 齊梁格（歌詩・楽府詩）

A 牀前看月光、疑是地上霜。舉頭望山月、低頭思故郷。
 B 牀前看月光、疑是地上霜。舉頭望明月、低頭思故郷。
 C 牀前明月光、疑是地上霜。舉頭望明月、低頭思故郷。
 D 牀前明月光、疑是地上霜。舉頭望山月、低頭思故郷。

II 非齊梁格（古詩短篇）

E 忽見明月光、疑是地上霜。起頭望明月、低頭思故郷。

右に示しているように、齊梁格に属しているA・B・C・Dの四バージョンは、何れも整齐たる四平頭詩であり、とくに平仄などの相違は存在していない。また、Eは、范德機が述べているように、

齊梁格と全く格律の違う「五言短古」であることが、改めて確認できる。これによって、范德機の記した「静夜思」本文が、彼の記憶ミスによるものである可能性も排除できる。

確かに、I類のみを考えると、「静夜思」に多くの異文が存在していたのは、本詩が李白歌詩の名作であるが故に伝唱の過程で無意識的に生まれた可能性も考えられる。しかしながら、詩型の違うII類古詩バージョンの存在が確認できたことによって、本詩の文字異同は、伝唱によってもたらされた錯乱ではなく、作者本人、つまり李白が意識的に異なるバージョンを制作したという可能性も浮上してくる。

近年、陳尚君氏が李白詩を整理・研究する際に、現存する李白詩に見られる夥しい文字異同は、その多くは李白本人の度重なる推敲・改作によって生まれた現象であることを明らかにした。また、氏は、李白の多くの詩が創作された背後に、『文選』という古典の土壤が存在していたことも指摘したのである。氏は、論文の最後に、この二点を理解することは、今後李白詩を読み解く上で重要なポイントとなりうることを、次のように述べている。¹¹⁾

李白は天才的詩人、詩思縱横、才思敏捷、言出意表、想牽世外、歷代論之多矣。清人黃周星甚至有太白寫詩用胸口一噴即成的誇張稱許。其實天才縱逸的另一面、則是極度勤奮地學習與修改。

相傳李白早年曾似『文選』數遍、今存文集集中之「擬恨賦」即其

子存。其于自存詩稿反復修改、本屬情理中事。本文列舉諸多內証、希望學者理解李白詩集中有定稿、有初稿、盡管二者皆存者只是其中很少一部分、但這些記錄如能得到正確認識、并據以梳理李白創作和修改的思路、無疑是很有意義的工作。我在最近寫定李白諸詩時、不僅逐一出校記錄、且努力將文本相近的詩篇歸並在一起、以便學者研讀。当然、牽涉到幾十首詩的改寫、難以展開討論、學者諒之。

四

ここまでの分析によって、現存する「静夜思」I・II兩類に見られる文字異同は、後人による改竄ではなく、陳尚君氏が指摘する李白本人による改作のケースに属していると思われる。一方、この「静夜思」の背後にも、陳氏のいうように、文選作品という土壤が存在しているのであろうか。

この問題を解く手掛かりは、他ならぬ范德機「五言古篇法」の後半部分に引く楊仲弘の言葉に潜んでいる。その後半の記事は、以下のようなものである。

楊仲弘曰、五言短古、衆賢皆不知來處。乃只是選詩結尾四句、所以含蓄無限意、自然悠長。此論惟趙松雪翁承吉深得之、次則豫章三日新婦曉得。清江知之、却不多用。

つまり、中唐時代以前の五言四句詩は、元々長篇の五言古歌詩の四句一節から独立されたものである。例えば、范德機記事の最初に引用される四句詩は、もともと六朝時代の無名氏の作であり、その全文は、明代の文人馮惟納『古詩紀』（影印文淵閣四庫全書本卷二十）をはじめとする多くの明代編纂の詩文総集に収められている。¹² 原文は以下の通りである。

古詩一首

步出城東門、悵望江南路。前日風雪中、故人從此去。我欲渡河水、河水深無梁。願為双黃鵠、高飛還故郷。

ちなみに、この詩の前四句は、のちに楊載（字仲弘、一二七一〔南宋咸淳七年〕～一三三三〔元至治三年〕）と肩を並べる元代四大詩人として名を挙げた揭傒斯（二二七四〔元至元十一年〕～一三四四〔至正四年〕）が、首句の「城東」を「城南」に改め、堂々と剽窃して自らの「晧出順承門有懷何太虚」詩として友人を送ったものである。¹³

楊仲弘が指摘したように、近体律詩の五言絶句が固定詩型に到達する前の、多くの五言四句詩は、長篇古詩の四句一節（とくに結びの一節が多いようである）を抜き出したもの、つまり、「截句」（なお、近体律詩はこれを「絶句」と読み換えた）という形を取ったものである。それゆえ、これらの短詩は、文字の少なさ故に読者にもたらず想像・吟味の空間が拡張される一面もあるが、もし元の作品

から全く離れてしまうと、本来の詩意を理解し難くなるという不利な側面もある。

もちろん、「静夜思」は、前引した無名氏詩のように五言古詩から独立した一節であるとは考えにくい。ただし、中唐の元稹・白居易が盛んに「新題樂府」「新樂府」を創作するようになる以前の、多くの樂府詩が、古詩ないし古樂府の詩意を踏襲していたことを考えれば、李白の「静夜思」も先行作品を踏まえて読み直した作品である可能性は十分考えられる。¹⁴

実は、先行の注釈書を手掛かりとして調べ直したところ、李白の「静夜思」は、『文選』巻二十九に収められる魏文帝曹丕の「雜詩二首」を踏まえて詠み直したものである可能性が浮上してきた。ちなみに、『文選』（胡刻本）に収録された「雜詩二首」詩の原文は、以下の通りである。

漫漫秋夜長、烈烈北風涼。展轉不能寐、披衣起彷徨。彷徨忽已久、白露霑我裳。俯視清水波、仰看明月光。天漢廻西流、三五正縱橫。草蟲鳴何悲、孤鴈獨南翔。鬱鬱多悲思、緜緜思故郷。

願飛安得翼、欲濟河無梁。向風長嘆息、斷絕我中腸。
西北有浮雲、亭亭如車蓋。惜哉時不遇、適與飄風會。吹我東南行、行行至吳會。吳會非我郷、安得久留滯。棄置勿復陳、客子常畏人。

さらに、「静夜思」と魏文帝曹丕詩の詩語を整理してみると、次のような明確な対応関係が見られるのである(【】の中は曹丕詩)。

牀前【展轉不能寐、披衣起彷徨】看月光【仰看明月光】、疑是
地上霜【彷徨忽已久、白露霑我裳】。擧頭望山月【俯視清水波、
仰看明月光】、低頭思故郷【鬱鬱多悲思、縣縣思故郷】【呉會非
我郷、安得久留滯】。

つまり、齊梁体と非齊梁体との異なる詩型に見られる「看月光」と「明月光」の両詩語は、何れにしても「雜詩」の「仰看明月光」に由来する詩語である。このことを踏まえてみれば、上述した「静夜思」の齊梁格の四つのバージョンが、伝承過程において無意識的に生じたものであるという可能性は依然として否定できないものの、李白本人が意識的に場面に応じて同じ歌の違うバージョンを制作した可能性も想定しうるのではないだろうか。ところが、後の文人は李白詩文集を編纂する際に、李白の「静夜思」を「歌詩・樂府詩」として帰類し、齊梁格のAのみ選び定めたと考えられる。それ故、刊本李白集における「静夜思」の本文は、単調にもAによって統一されてしまったのであろう。

おわりに

本稿の分析に間違いがなければ、現存する「静夜思」の第一句に、

「牀前看月光」と「牀前明月光」という二種類のバージョンが存在しているのは、恐らくその原型作品である「仰看明月光」の一句を踏まえて生じたものであると考えられる。さらに、齊梁格と古詩(非齊梁格)との二つのバージョンの存在からは、これらの異同が伝唱過程で生まれた無意識的なものではないことも考えうる。第三句の「擧頭望山月」と「擧頭望明月」との文字異同を含め、本詩に五つのバージョンが存在していたことは、想像を逞しくすれば、詩人李白本人が、宴の場面や情景に応じて、微調整した本文を場に応じて提供したことによって世に広まったものであると、考えることも許されるのではないだろう。なぜならば、この詩を伝唱する人々は、たとえ一定の音律知識があつたとしても、それらの文字異同の背後に、この歌の原型作品が存在していることを知る由がないからである。何れにしても、現存する各バージョンの「静夜思」本文に見られる文字異同は、その原典である魏文帝「雜詩」が存在していたからこそ生じたものであると考えられる。

さらに重要なのは、李白の「静夜思」を、原型作品である魏文帝「雜詩」(とくに第一首)と合わせて読むと、この詩は、単なる一郷愁を歌うものではなく、安史の乱における永王従軍時の作品である可能性が浮上してくるのである。だとすれば、この詩には、当時の李白のより複雑な心情が読み込まれていた可能性もある。これについては、今後、魏文帝詩の李善注や李白のほかの作品と読み合わせ、更なる考察が必要である。

〔注〕

- (1) 『藤井良雄先生定年記念 福岡教育大学国語科研究論集』第五十六号（二〇一五年三月）所収。
- (2) 瞿蛻園・朱金城校注『李白集校注』（上海古籍出版社、一九八〇年）卷六「樂府」を参照。
- (3) 森瀬寿三「李白『静夜思』本文の異同」（『関西大学文学論集』第三十九号初出、一九九〇年二月。のち同氏『唐詩新考攷』に収録、関西大学出版部、一九九八年）を参照。
- (4) 前掲注(3)森瀬論文を参照。
- (5) 森瀬寿三「李白『静夜思』その後」（『関西大学中国文学会紀要』第三十七号、二〇〇六年三月。のち同氏『唐詩新攷補篇』に収録、関西大学出版部、二〇〇八年）を参照。
- (6) 広韻は、周祖謨校『廣韻校本』（中華書局、二〇一一年）を参照。平水韻は、丁度撰『附釈文互註礼部韻略』（光緒二年川東官舎印本）を参照。
- (7) なお、民国における『唐詩三百首』の大量出版及び流行については、周作人「唐詩三百首」（一九五八年四月一日『新民晚報』初出、鐘叔河編訂『周作人散文全集』第十三卷に再収、広西師範大學出版社、二〇〇九年）を参照。
- (8) 四庫全書本所用の底本は内府蔵版本。ただし、明萬曆卓顯卿刻本影印本（上海辭書出版社、一九八九年）及び文化十五年肥後松崎氏據萬曆刊本重刊本（九州大学附属図書館所蔵本）に、「牀前看月光、疑是地上霜」に作る。
- (9) 例えば、明・胡震亨撰『唐音癸籤』（影印文淵閣四庫全書本）卷十「評彙六」には胡応麟評語を引き、次のように述べている。「太白五言如静夜思、玉階怨等妙絶古今、然齊梁體格他作視七言絶句、覺神韻稍小減、縁句短逸氣未舒耳。右承輞川諸作却是自出機軸、名言兩忘、色相相俱泯、另是一家題裁。元瑞」
- (10) 明・胡文煥輯『格致叢書』所収本。なお、『金針詩格』の作者及び本文の考証については、船津富彦「金針詩格についての疑い」（『東洋文学研究』第三号、一九五四年）と、金子貞也「金針詩格」と『續金針詩格』（『中国語文』第二三二号、一九八五年）を参照。
- (11) 陳尚君「李白詩歌文本多歧狀態之分析」（『學術月刊』第四十八卷二〇一六年第五期）を参照。
- (12) ちなみに、范德機記事に最後に引用した四句詩は、『樂府詩集』卷八十二に収録されている李端「拜新月」詩である。この詩の構成については、『御定詞譜』卷一に、以下のような説明が窺える。
「拜新月、單調二十字、四句兩仄韻。開簾見新月（句）、即便下階拜（韻）。細語人不聞（句）、北風吹裙帶（韻）。此即唐仄韻五言絶句、而語氣微拗、填此詞者、其平仄當從之」。
- (13) 『掲文安公全集』（四部叢刊正編）卷一を参照。
- (14) 白居易の「新樂府」や元稹の「新題樂府」に関する研究は、静永

健『白居易『諷諭詩』の研究』（勉誠出版、二〇〇〇年）を参照。

なお、中唐時代の「歌詩」に関する研究は、拙稿「中唐における白居易「琵琶引」享受の原風景―その原本形態及び歌唱形式について―」（『白居易研究年報』第十三号、二〇一二年十二月）及び「歌詞としての「長恨歌」―白居易歌詩の押韻について―」（『中國中世文學研究』第六十五号、二〇一五年十二月）を参照された

(15) 李白詩文集の編纂及び伝承経緯に関しては、前掲(11)陳尚君論文を参照されたい。

*附記 本稿は、JSPS 科研費16K025886「日本に現存の旧鈔本を中心とする文選資料群に関する総合的研究」による研究成果の一部である。

**A Study of the History of Textual Changes of *Li Bai* 李白’s
Quiet Night Thought 静夜思 :
its Connection with *Wei Wendi* 魏文帝’s *A Couple of Zashis*
雜詩二首 Collected in *Wen Xuan* 文選**

Chen CHONG

This article is one of the author’s investigations into the acceptance of *Wen Xuan* language on *Tang* poetry, including works by *Du Fu* 杜甫, *Li Bai*, *Bai Juyi* 白居易 and *Yuan Zhen* 元稹, and of the influence of *Li Shan* 李善’s *Annotations*.

In his previous article, “Fears of Spring: An Investigation into *Du Fu*’s acceptance of *Li Shan*’s *Annotations of Wen Xuan*”, the author analyzed *Du Fu*’s *Jue Ju* 絕句 (*Enjoying Flowers Walking Alone on a River Bank* 江畔獨步尋花) and points out that *Du Fu*’s poems were greatly influenced by language used in *Wen Xuan* and *Li Shan*’s *Annotations*.

In this article, the author mainly focuses on textual changes in *Li Bai*’s *Quiet Night Thought*. He casts doubt on the widely-accepted belief that some scholars in the *Ming* Dynasty tampered with the poem and calls for an immediate review of the theory. By studying the rhyme scheme of its potential prototypical verses, the author also finds that the poem is actually a five-character four-line short verse created on the basis of *Wei Wendi*’s *A Couple of Zashis* collected in *Wen Xuan*, from which many latter-day versions are derived.